

# 史跡 慈照寺（銀閣寺）旧境内

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告  
二〇〇八―一

史跡  
慈照寺（銀閣寺）  
旧境内

2009 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人  
京都市埋蔵文化財研究所







# 史跡 慈照寺（銀閣寺）旧境内

2009 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、これまでに多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた古都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様へ京都の地域の歴史に対し関心を深めていただけるよう努めております。

当研究所では、平成13年より個々の発掘調査の概要をまとめた報告書を刊行しており、その成果を公表しています。

このたび、研修道場新築工事にともなう史跡 慈照寺（銀閣寺）旧境内の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきましてご意見、ご批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際してご協力ならびにご支援たまわりました関係者各位に厚く感謝し、お礼申し上げます。

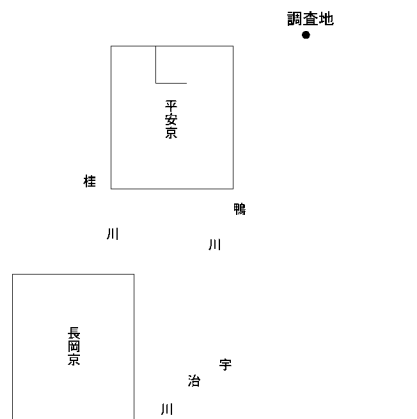
平成21年1月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

# 例 言

- 1 遺 跡 名 史跡 慈照寺（銀閣寺）旧境内
- 2 調査所在地 京都市左京区銀閣寺町 慈照寺境内
- 3 委 託 者 宗教法人 慈照寺 代表役員 有馬頼底
- 4 調査期間 2008年11月28日～2008年12月26日
- 5 調査面積 28 m<sup>2</sup>
- 6 調査担当者 高橋 潔・大立目 一
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「田中」「吉田」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 高橋 潔
- 14 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



(調査地点図)



# 目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	2
2. 調査地の位置と環境	4
(1) 歴史的環境と立地	4
(2) 既往の調査	4
3. 調査の概要	5
(1) 調査の概要	5
(2) 層 序	5
(3) 遺 構	8
4. 出土遺物の概要	10
5. ま と め	12

# 図 版 目 次

図版1	遺構	1	1区第1面全景（北から）
		2	1区第2面全景（北から）
		3	1区・拡張区第2面全景（北西から）
図版2	遺構	1	1区石積遺構SX 4検出状況（北から）
		2	1区石積遺構SX 4転落石除去状況（北東から）
図版3	遺構	1	拡張区断割状況（北西から）
		2	1区南半土手南石垣検出状況（南から）
		3	2区全景（北から）
図版4	遺物	1	1区石積遺構SX 4前面埋土出土土器（外面）
		2	同上（内面）

## 挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：500）	2
図3	1区調査前全景（南東から）	3
図4	2区調査前全景（北から）	3
図5	1区・拡張区作業風景（北西から）	3
図6	1区埋戻し状況（北東から）	3
図7	1区・拡張区遺構平面図および層名（1：50）	6
図8	1区・拡張区断面図（1：50）	7
図9	2区遺構実測図（1：50）	9
図10	1区石積遺構 SX 4 前面埋土出土遺物実測図（1：4）	11
図11	室町時代後期主要遺構分布図（1：400）	12

## 表 目 次

表1	遺構概要表	8
表2	遺物概要表	10

# 史跡 慈照寺（銀閣寺）旧境内

## 1. 調査経過

### (1) 調査に至る経緯

調査地は、京都市左京区銀閣寺町慈照寺（銀閣寺）の境内であり、昭和6年（1931）に国によって指定された「史跡 慈照寺（銀閣寺）旧境内」の範囲内にあたっている。

現慈照寺の境内の北半部にあたる当地で、建築工事中の研修道場建物に関連する排水管・電気ケーブルなどの埋設工事が計画され、遺構の破壊が予想されることから、工事に先立って埋設工事経路の発掘調査を行うこととなった。調査は、京都市文化市民局文化芸術推進室文化財保護課（以下、文化財保護課という）の指導の下、（財）京都市埋蔵文化財研究所が担当した。なお、建設中の研修道場（禅堂）の範囲については、その工事に先立って2007年11月9日から2008年1月29日にかけて、発掘調査を行っている<sup>1)</sup>。

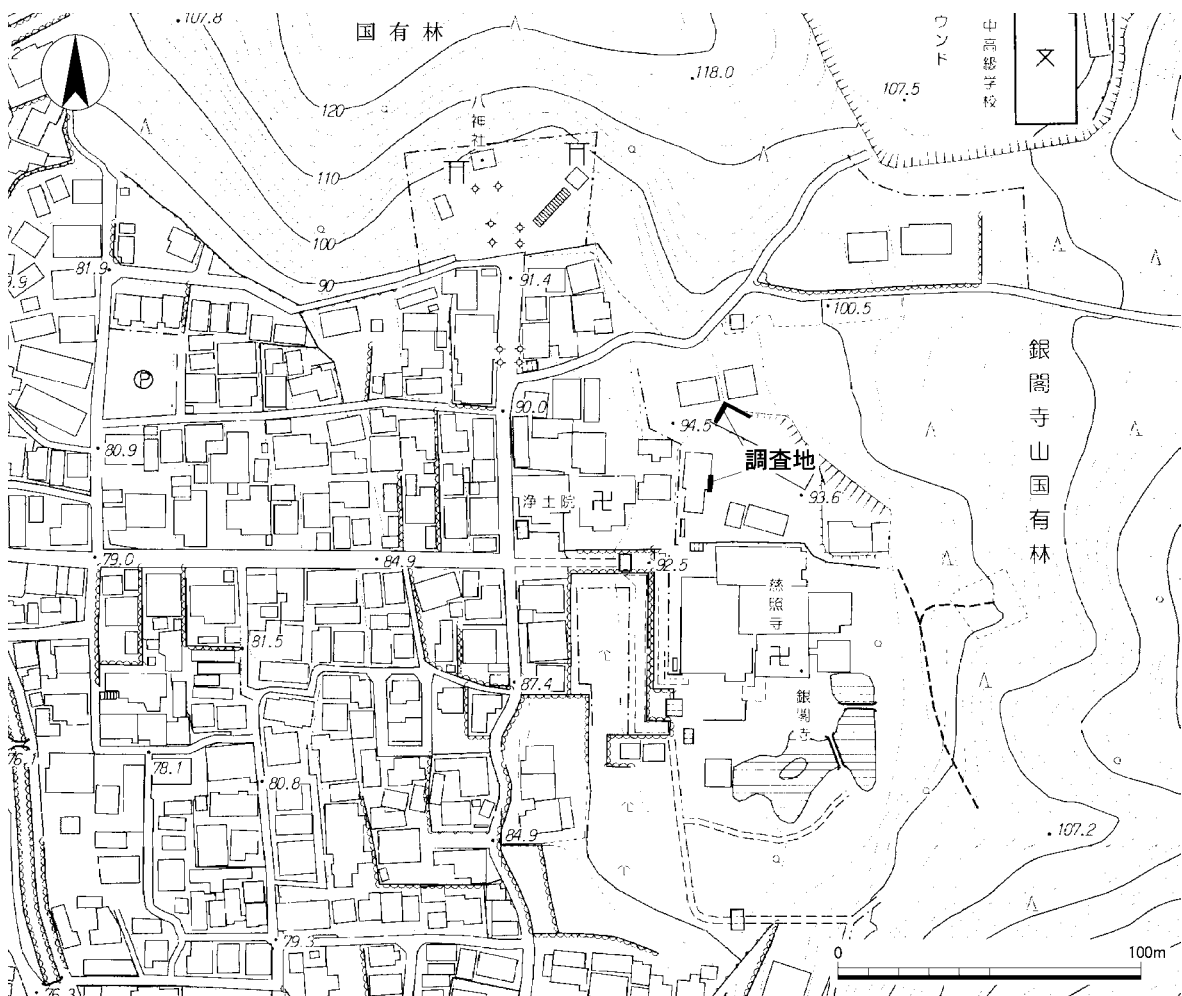


図1 調査位置図 (1 : 2,500)

## (2) 調査の経過

調査地では、排水管・電気ケーブルなどの埋設が防災道路を横断する形で計画された1区と、研修道場の西側でガス管の埋設が計画された2区の2箇所に調査区を設けた。調査は2008年12月1日に開始した。

1区は、防災道路を横断し、その南の土手状の高まりを貫通する形で北東-南西方向、幅1.5m、長さ7.5mの長方形の調査区を設定した。1区の北半は防災道路、南半は土手状の高まりである。1区の調査は道路面のコンクリート舗装の除去より始めた。この道路は緊急車両進入のため、コンクリートが0.2mの厚さで敷かれており、さらに下面には縦横に鉄筋が施されていた。このため、重機だけでは除去できず、急遽削岩機を用意して、コンクリートを砕きながらの作業となった。舗装コンクリート除去後は、人力により掘削を行い、舗装に伴う現代層を除去した面を第1面として調査を進めた。1区北半では第2面で、2007年度の調査で検出した石垣を伴う溝や堤状遺構と一連の遺構と考えられる石積遺構SX4を良好に検出した。また、1区南半は土手状の高まりを断ち割り、また土手南側の掘り下げを人力で行った。

1区北半で部分的な検出に留まったSX4の広がりを確認するため、文化財保護課の指示により、1区の東で排水管の配管工事が予定され、かつ未調査である部分を対象に幅1m、長さ8mを拡

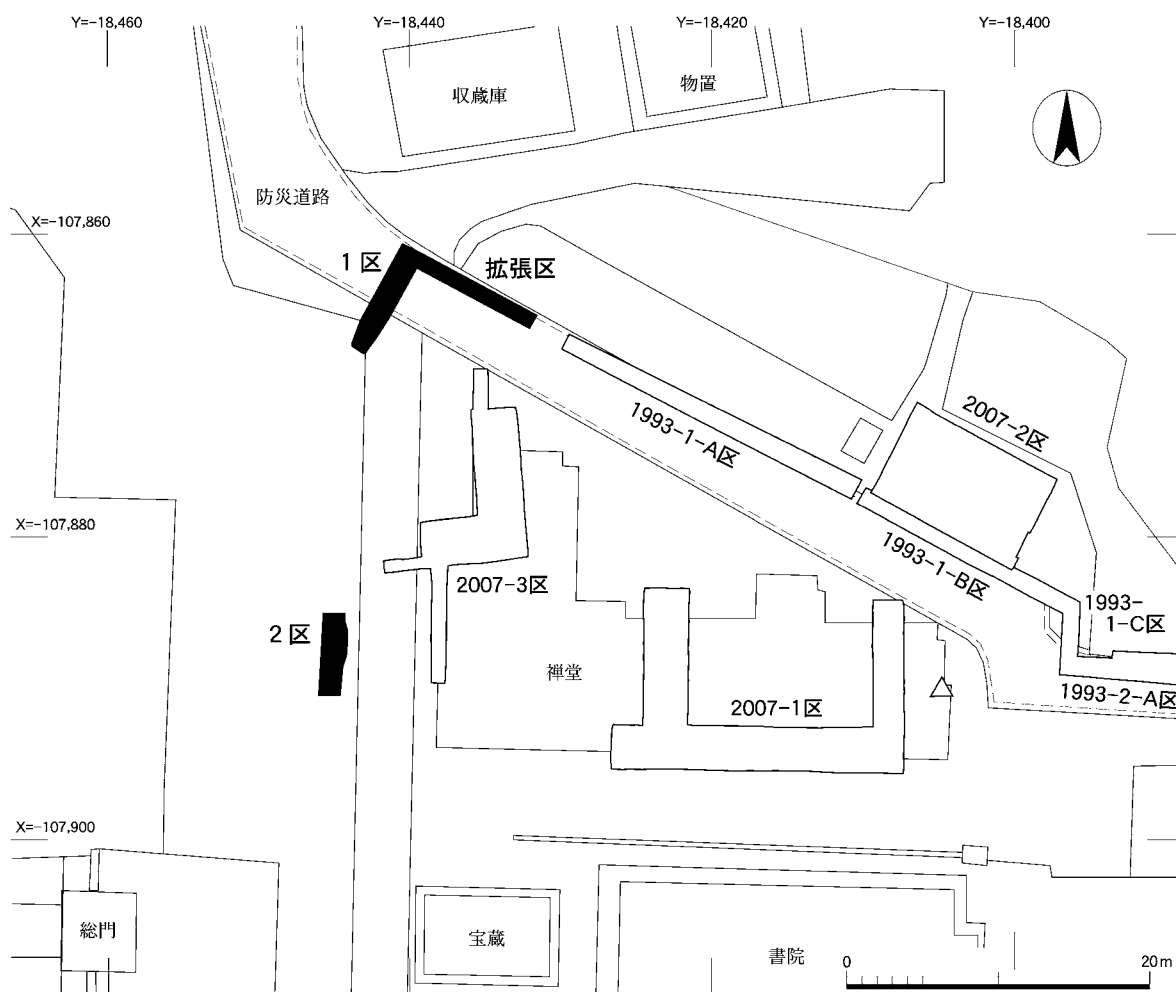


図2 調査区配置図 (1:500)



図3 1区調査前全景（南東から）



図4 2区調査前全景（北から）

張り調査を行うこととなった（1区拡張区）。1区および拡張区では排水管埋設のための工事掘削深が地表下1.5mであることから、その深さまでの遺構の状況確認が必要であり、1区では西端、拡張区では北端を工事掘削に最低限必要な幅0.5mで断ち割る形で調査を進め、適宜遺構面を確認しながら掘削を行った。断割による調査という制限上、主に断面での土層観察に終始せざるを得なかったが、室町時代の遺構面、さらにその下層にそれ以前の遺物包含層、地山と考えられる岩盤層を確認することができた。遺構面および断割壁面の保護のため、土嚢を遺構面に敷き詰めてシートで被覆して排土で埋戻しを行った。

2区は、ほぼ南北方向に、幅1.5m、長さ5.5mの長方形の調査区とした。地表下0.3m前後までを重機によって掘削し、以下は人力で掘削を行った。2区を設定した場所は、以前約1mの段差をもって低くなっており、後に現在の高さまで盛土された。このため1.3mの深さ（標高91m前後）まで掘削を行ったが、掘削範囲内がすべて現代の積土であった。2区は配管埋設による掘削深度が地表下0.5mまでであることから、以下の掘削は行わず、掘削下面を土嚢で覆い、排土によって埋め戻した。

調査中の排土は、境内の一部に溜め置き、埋戻しに利用した。また、道路舗装のコンクリート殻は搬出し処分した。すべての作業は12月26日に終了した。



図5 1区・拡張区作業風景（北西から）



図6 1区埋戻し状況（北東から）

## 2. 調査地の位置と環境

### (1) 歴史的環境と立地

慈照寺は臨濟宗相国寺派の寺院で、北山の金閣に対して観音殿を「銀閣」と呼ぶことから、銀閣寺として親しまれている。足利八代将軍・義政が晩年に隠棲の場として構えた山荘を、死後に寺院に改め、慈照寺と称した。

義政が東山殿を構える前には、浄土寺が当地にあったと伝えられている。10世紀には成立していたと見られるが、宝徳元年（1449）に出火、境内の建物の大半を失った。

義政は文明14年（1482）にこの地を選び、山荘・東山殿の造営に着手した。翌15年には常御所が完成し、移徙した。その後、東求堂、西指庵、超然亭、会所などが建立され、長享3年（1489）に観音殿（銀閣）が上棟されるが、義政は完成を待たず延徳2年（1490）に死去する。遺命により義政の法号に因んで慈照寺とされた。その後、室町幕府の衰退や戦国期の争乱などに巻き込まれ荒廃するが、江戸時代に入ると宮城丹波守豊盛らによって大規模な再建が行われ、建物の新造・修復、庭園の整備がなされた。現在の景観はこの頃に整えられたと考えられている。

調査地は慈照寺境内、主要建物や庭園の北側奥の平坦地に位置している。如意ヶ岳の北西麓、中尾山と大文字山の間谷筋を流れ出た大文字川が形成する扇状地にあたっており、地勢はおおよそ北東から南西に向って下がる緩傾斜地である。ここを人為的に開削して境内が占地する平坦面を造り出している。

### (2) 既往の調査

慈照寺境内の既往の調査については、2003年度の調査概報<sup>2)</sup>を参照されたい。ここでは、本調査に関連する、主要伽藍の北側の地域で行った1993年度調査の一部および2007年度調査について簡単に触れておくことにする。

1993年度調査<sup>3)</sup>は、境内北東部地域と観音殿周辺における防災工事に伴って行った発掘調査・立会調査である。このうち北東部地域では調査区を1-A～C区、2-A区を設定した。2007年度調査<sup>4)</sup>は、本調査に先行する調査で、研修道場建設および休憩施設建設に伴い、1～3区の3箇所<sup>4)</sup>の調査区を設定した。これらの調査では室町時代後期（東山殿および慈照寺）の遺構群を検出している。山裾部を鉤の手に折れ曲る石垣を伴う溝（2007-2区石垣7・溝8、1993-2-A区SD20）とその南の平坦部に東西方向を主体とした堤および溝状遺構（2007-1区堤30・溝29・33、2007-3区小堤35～37・溝31・34）などである。石垣を伴う溝は北西から南東への水流が復元できることから、境内北側の大文字川から取水し、錦鏡池への導水の機能が考えられている。また、堤および溝状遺構は、山側（北東方向）からの洪水砂層に覆われていることなどから、土石流に備えた水防・砂防ダムの機能が考えられた。

本調査でもこれらに類する遺構が検出されるものと予測された。

### 3. 調査の概要

#### (1) 調査の概要

1区・拡張区の調査 1区北半・拡張区は、防災道路の舗装のコンクリートおよび関連する碎石などを除去し、第1面、第2面と調査を進めた。1区北半で室町時代の石積遺構を良好に検出したため、東側の未調査区を調査することとなった(拡張区)。1区北半については面的に掘り下げを行ったが、拡張区については遺構保存の観点から配管のために最低限必要な幅0.5mで北壁を断割による土層観察を主体とし、適宜遺構面の確認を行った。

1区南半は土手状の高まり部分と一段低い南側の現代層の除去を人力により開始した。土手状部分は西端を断ち割り構築状況の検討を行い、土手南側は近年の積土の掘り下げを行った。

2区の調査 2区では掘削を進めた結果、地表下1.3mまでが近年の積土であることがわかり、下面では地山と思われる砂礫層を検出したに留まり、顕著な遺構は検出できなかった。工事掘削深が地表下0.5mまでであることから以下の掘削は行わなかった。

#### (2) 層序

1区北半と拡張区は防災道路上であり、上面は平坦で標高はおおよそ93m、やや西が高く東へ緩やかに傾斜している。1区南半は幅2mほどの土手状を呈して高まっており、その頂部は道路面より0.5m高く、土手を越えた南側は道路面より0.6m低くなっている。土手の南側は平坦になっており、2区と同一面をなしている。

1区北半・拡張区では、道路舗装のコンクリートが厚さ0.2m、舗装に関連する碎石などが0.05m前後ある(現代層)。これを除去した面を第1面とした。江戸時代の整地面と考えられ、上面は緩やかに東から西へ傾斜する(灰黄褐色砂泥など、厚さ0.1~0.3m、図8-30~32層)。西部ではこの上面を土石流によると考えられる褐色から灰黄褐色の粗粒砂を主体とした砂礫層に覆われる(図7・8-2・21・28・29層)。長径0.5m前後の花崗岩を多く含む。これらを除去した面を第2面とした。第2面は灰黄褐色の砂礫を主体とする堆積層の上面である。第2面が室町時代後期の遺構面である。第2面も東から西へ緩やかに傾斜して、西端には石積遺構SX4が構築される。第2面を形成する灰黄褐色を主体とする砂礫層からは平安時代から鎌倉時代の土師器皿を主体とする遺物が出土する。概ね東から西への堆積状況を示しており、層中には長径が0.5~1mほどの大きな花崗岩が何箇所かで集中するように検出したが、遺構としては認識できず北東の山側からの土石流による堆積であると考えられる。

2区は、先述のように掘削範囲内がすべて現代の積土であり、積土の下面、標高91m前後で灰黄色砂層を確認した(図9)。東に隣接する2007年度3区では、標高92m前後で堤や溝などが検出されており、当地ではそれよりも低い層準まで現代積土であることから、既に遺構は失われていると考えられる。

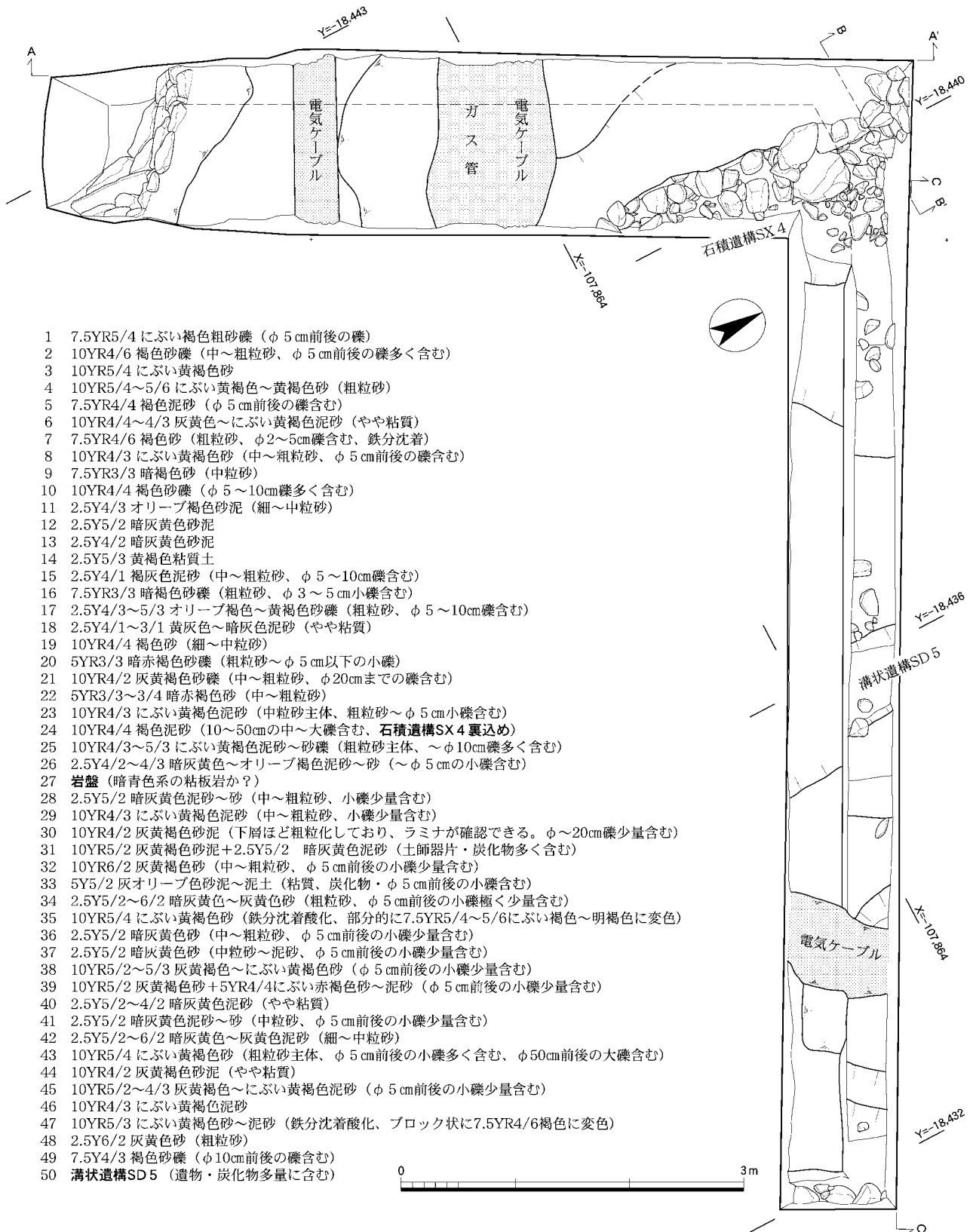


図7 1区・拡張区遺構平面図および層名 (1:50)



石積遺構SX4部分北壁

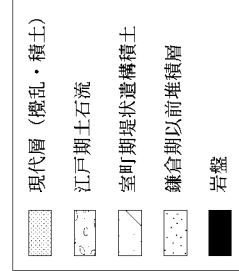
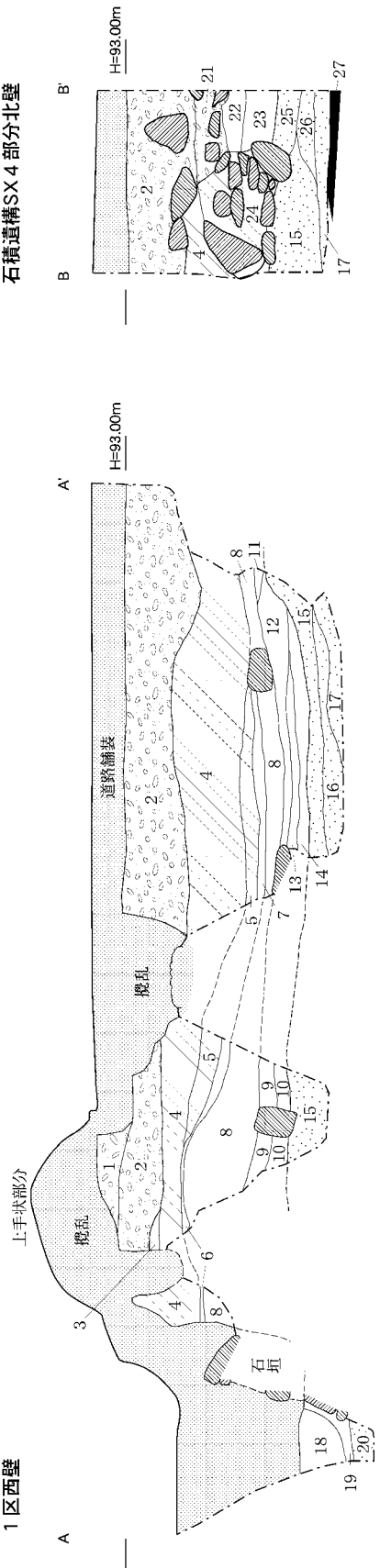


図8 1区・拡張区断面図 (1:50)

※ 断面の位置、層名は図7参照

### (3) 遺 構

遺構は1区・拡張区で検出した。遺構面としては、第1面、第2面を確認した。

第2面以下は土石流による堆積層であると考えられるが、比較的多くの室町時代以前の遺物が出土した。これらの層は北東の山側から下ってきた堆積状況を示すことから、北東方向の山側には室町時代以前の遺構群が存在する可能性が考えられる。

また、1区の南半には土手状の高まりがあり、その南面には石垣を検出した。土手状の高まりは電気ケーブルを埋設する際になされた現代のものである。その南の石垣は近年に積土がなされるまでは、切り下げられた南側の土地境に築かれたものと考えられ、正確な構築時期は不明であるが、江戸時代以降と考えられる。なお、石垣の下層では1区・拡張区の第2面以下の土石流による堆積層に相当する暗赤褐色砂礫層（図7-20層）を検出している。

第1面 遺構としては拡張区で検出した整地層と考えられる灰黄褐色砂泥（厚さ0.1～0.3m、図8-30～32層）がある。この上面は東から西へ緩やかに傾斜する。この上面では顕著な遺構は検出できなかった。西側でこれを覆う褐色から灰黄褐色の粗粒砂を主体とした砂礫層（図7・8-2・21・28・29層）は、土石流によるものと考えられる。後述する室町時代後半の石積遺構の埋没後であるので、江戸時代前半期と考えられる。

第2面 遺構は石積遺構SX4とこれに伴う堤状遺構、溝状遺構SD5がある。遺構面は東から西へ緩やかに下がる傾斜面をなしており、その西端に石積遺構SX4・堤状遺構が構築される。

石積遺構SX4は、南北方向の東面する石積遺構で、ほぼ座標南北軸を示す。西側に積土による堤状の高まりを伴い、その東向きの擁壁として構築される。崩壊が著しいが、残りの良い箇所では2石から3石を積み上げている。基底部に長径0.3mほどの石を並べ、その上にやや大きい長径0.5～0.7mの石を積み上げる。基底部から堤状遺構の上部までは0.6m前後である。今回の調査範囲では堤状遺構の西端を確認することはできなかった。図7に示した網掛けした部分の石は転落石と考えている。

溝状遺構SD5は拡張区の断割部分で検出した幅1mの浅い溝状遺構である。埋土に多くの炭化物を含んでいる。検出した範囲は狭いが、座標南北軸にほぼ合った方位を示している。

表1 遺構概要表

検出面	時 代	遺 構
第1面	江戸時代前半期	整地層（図8-30～32層）
第2面	室町時代後期	石積遺構SX4および堤状遺構、溝状遺構SD5
第2面以下	室町時代後期以前	土石流による堆積層

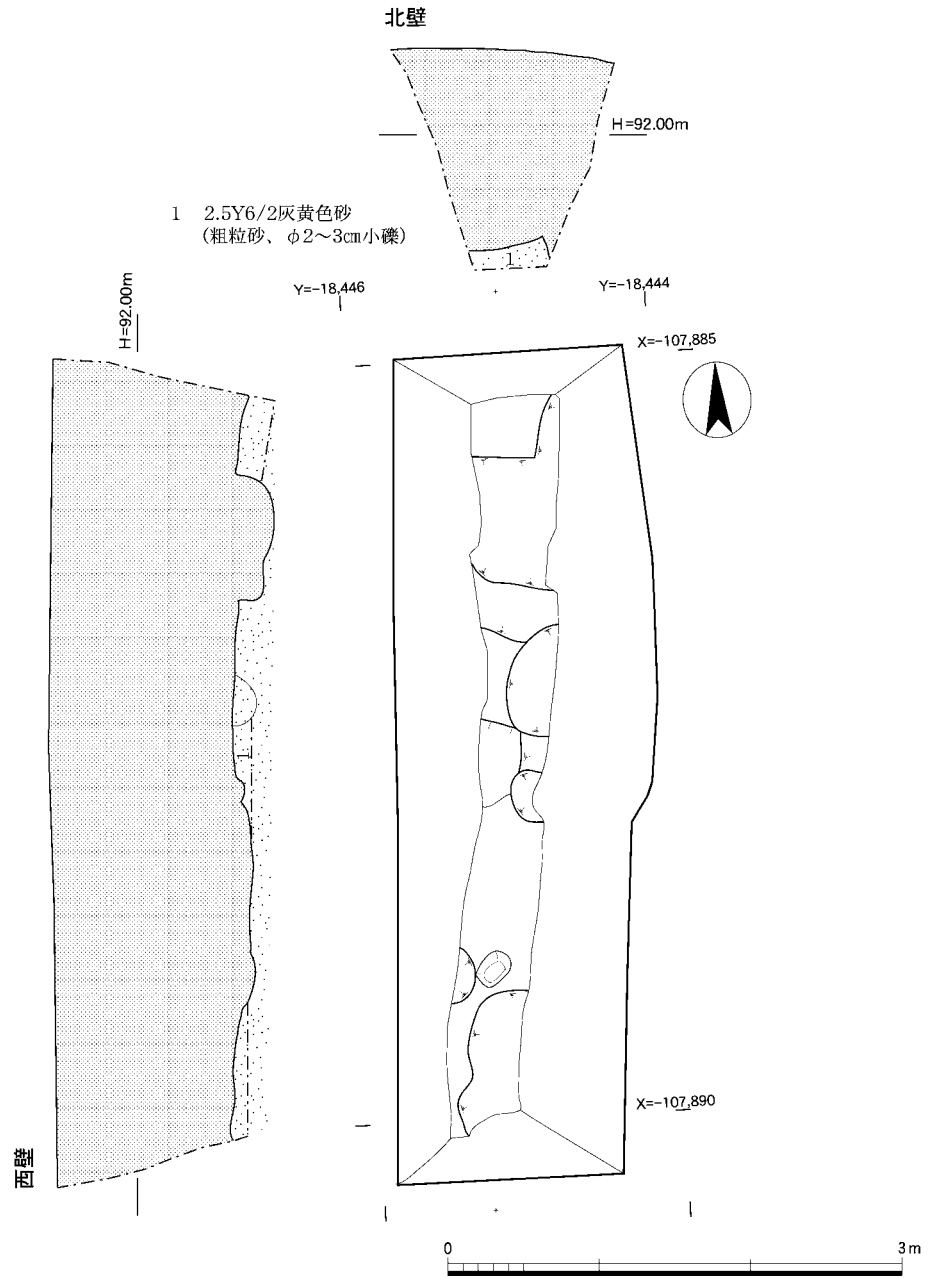


图9 2区遺構実測図(1:50)

## 4. 出土遺物の概要

遺物は整理箱に4箱出土した。土器類が大半であり、極く少量瓦類がある。土器類ではほとんどが土師器であり、なかでも皿類が大半を占めている。他には須恵器、黒色土器、瓦器、緑釉陶器、灰釉陶器、施釉陶器、磁器などがある。瓦類は丸瓦・平瓦の破片のみで、軒瓦はない。遺物の時代は平安時代中期から江戸時代に及ぶ。なお、飛鳥時代と考えられる須恵器杯身が1点のみ出土している。土器類の年代観は平安京・京都I～期編年<sup>5)</sup>に準じた。

平安時代から鎌倉時代の遺物は、第2面以下の砂礫層を中心に、室町時代や江戸時代の整地層などにも多く混入して出土している。土師器が中心で、その他の器種は極く少量である。主な時期は平安時代後期(IV期)、鎌倉時代前半(VI期)と考えられる。

室町時代の遺物は、おもに後半期(IX期中から新段階)に位置付けられる。やはり土師器、とくに皿類が主体で他の器種は少量である。土師器皿では白色系のものが主体で、灯明皿として用いられた痕跡が残るものが多い。

ここでは、第2面の遺構である石積遺構SX4の埋土出土遺物について取り上げる。

石積遺構SX4埋土出土遺物(図10)土師器皿が大半を占めるが、須恵器・瓦器・灰釉陶器・白磁・青磁・焼締陶器、瓦類などが出土した。ほとんどが小片であった。比較的残存状況の良好なものを選んで図示した。いずれもSX4前面を埋めるにぶい黄褐色泥砂層(図8-23層)から出土したものであるが、一見して時期幅があることがわかる。

土師器皿(1～11)では白色系のものが主体を占めている。いずれも内面と口縁部外面はヨコナデ調製し、体部外面はナデあるいは指頭圧で仕上げる。また胎土は概ね精良で砂粒を含まない。1は復元口径6.8cm、器高1.7cm、いわゆるヘソ皿である。灰白色(10YR8/2)。2は復元口径8.4cm、器高1.8cm、体部外面を強い指頭圧痕がのこる。浅黄色(10YR8/3)。3は復元口径8.2cm、器高1.7cm、口縁端部を丸く納める。浅黄橙色からにぶい橙色(10YR8/3～7.5YR7/3)。4は復元口径9.8cm、器高1.7cm、口縁部内面をやや強めにナデる。灰白色(2.5Y8/2)。5は復元口径9.8cm、

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代～鎌倉時代	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦	1箱	土師器2点、須恵器1点、緑釉陶器1点、施釉陶器2点、瓦器2点	0.5箱	0箱
室町時代	土師器、須恵器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦	2.5箱	土師器9点	2箱	0箱
江戸時代以降	土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、瓦器、瓦	1.5箱		1.5箱	0箱
合計		5箱	17点(1箱)	4箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

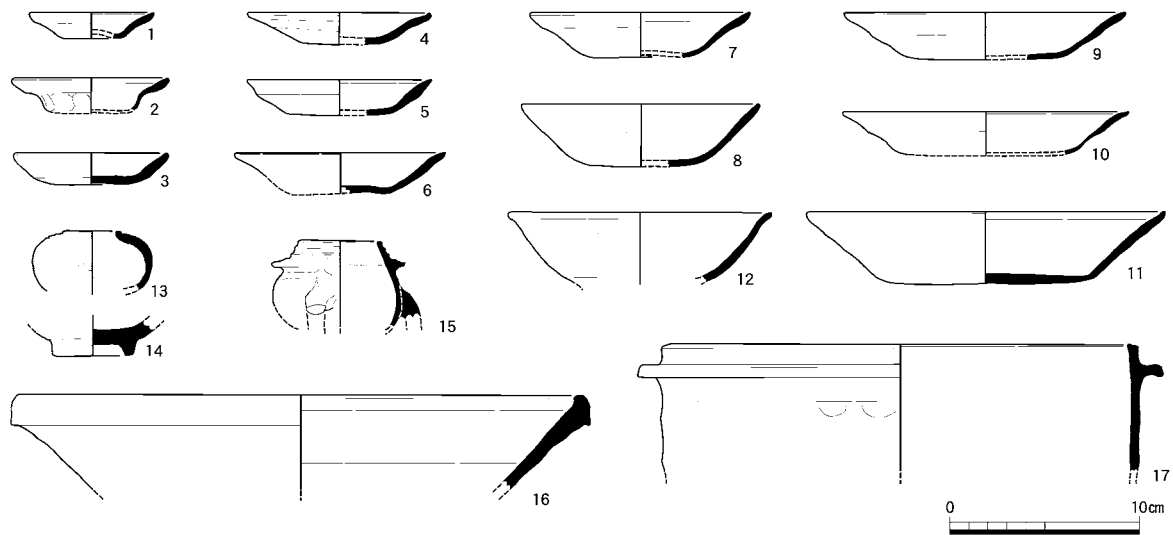


図10 1区石積遺構SX 4前面埋土出土遺物実測図(1:4)

器高 1.9 cm、口縁端部を強くナデてとがらせる。にぶい黄橙色(10YR7/3)。6は復元口径 11.2 cm、器高 2.2 cm、口縁端部を外方向へつまみ出す。灰白色(10YR8/2)。7は復元口径 11.7 cm、器高 2.3 cm、口縁端部がやや厚みをもって納める。灰白色(7.5YR8/2)。8は復元口径 12.6 cm、器高 3.3 cm、口縁端部を丸く納める。灰白色(10YR8/2)。9は復元口径 14.9 cm、器高 2.5 cm、体部が大きく開く。灰白色(2.5Y8/2)。10は復元口径 15.2 cm、器高 2.3 cm、薄手で体部が大きく開く。灰白色 10YR8/2)。11は復元口径 19 cm、器高 3.9 cm、厚手で堅緻であり外面には指によって粘土を引き上げた痕跡が螺旋状に残る。浅黄橙色(7.5YR8/4)。1・2・4～7・9～11は京都IX期に属すると考えられ、15世紀中から後半頃に位置付けられる。3・8は京都VII期に属するもので、13世紀後半から14世紀前半と考えられる。

図10に図示できた土師器皿以外の器種は、いずれも平安時代後期から鎌倉時代の所産であり、先行する遺構などより混入したものと考えている。12は緑釉陶器である。復元口径 14 cm、素地は精良な土師質でにぶい橙色(7.5YR7/4)、内外面とも釉が剥離し部分的に残存する。13・14は瀬戸美濃とみられる施釉陶器である。13は復元口径 3.1 cm、胴部最大径は 6.4 cm、肩部と胴部に櫛状工具による沈線が繞る。小型の壺、あるいは注口がついて水差のようなものかもしれない。14は鉄釉の椀の底部、高台は貼り付けられている。底部径は 4.3 cm。15は瓦器、ミニチュア羽釜である。三方向に脚がつくと思われるが、欠損している。復元口径は 4.5 cmである。16は東播系須恵器の鉢、おそらく片口がつく。復元口径 29.8 cmで、体部は直線的に開く。17は瓦器羽釜、復元口径は 25.2 cm。口縁部は短く直立して、端部にはやや外傾する面をもつ。

## 5. まとめ

本調査では1区および拡張区において、江戸時代（第1面）の整地層、室町時代後期（第2面）の石積遺構 SX 4 およびこれと一体の堤状遺構、溝状遺構 SD 5 を検出した。また、第2面以下においても断割調査により平安時代から鎌倉時代の遺物を含む砂礫層を確認した。一方、2区では現地表面から 1.3 m までを掘り下げたが、すべてが近年の積土であることが判明し、工事掘削深が及ばないことから、以下の掘削を行わなかった。

1区および拡張区で検出した石積遺構 SX 4 は、西側に堤状の高まりを控える東向き擁壁として 2～3 段の石積を検出した。当初 2007 年度調査の 3 区で検出したような、両側を石積で護岸した溝状になるものと考えたが、東側では石積が検出できなかった。石積の前面では石積に用いられたと推定される石材が崩れ落ちた状態で検出されたので、元来石積はもう 2～3 段高かったとみられる。本調査では検出範囲が狭かったものの、石積遺構 SX 4 の前面は、ほぼ座標南北軸ラインにのっていることが確認でき、2007 年度調査で検出している室町時代後期の石垣溝や堤・溝など一連の遺構であることがわかる。しかし、本遺構が部分的な検出であったため、総体としてどのような遺構の部分構成しているのか明確にすることができなかった。しかし、地形などを勘案して、東山殿・慈照寺の寺域北部の西限に関係する遺構であると考えておきたい。

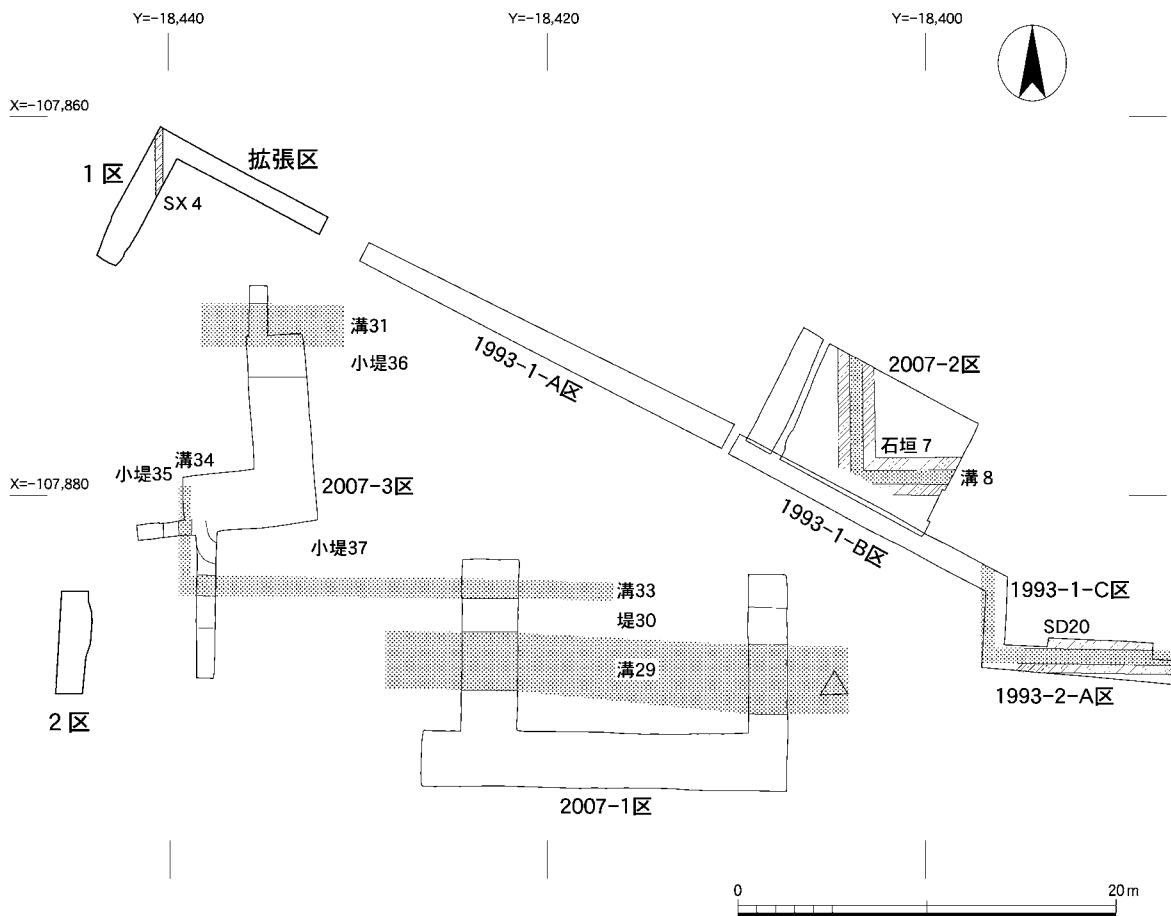


図 11 室町時代後期主要遺構分布図（1：400）

また、今回1区・拡張区の第2面以下で確認した平安時代から鎌倉時代の遺物を含む砂礫層の検出は重要であると考え。この砂礫層は北東方向からの土石流などによる堆積状況を示している、この方向に当該期、東山殿以前の遺構が存在することを示唆している。また、当初平安期の整地層と思えるほど江戸時代の整地層に平安時代後期の遺物を多く含んでおり、近辺に遺構の存在を思わせる。おそらく本調査地点より北東方向の山裾傾斜面に当該期の遺構群が存在する可能性が高いと考えられる。

以上のように、慈照寺旧境内遺跡では遺構が良好に遺存しており、本調査のように狭い範囲の調査であっても、遺構・遺物ともに良好に成果が得られる。東山殿・慈照寺および先行する浄土寺の実態を明らかにするためには、例え狭い範囲であっても、今後も慈照寺境内での調査を継続して、成果を重ねていくことが必要だと考える。

#### 註

- 1) 内田好昭『史跡 慈照寺（銀閣寺）旧境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-16（財）京都市埋蔵文化財研究所 2008年
- 2) 高橋 潔・近藤知子『史跡 慈照寺（銀閣寺）旧境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2003-1（財）京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 3) 南 孝雄ほか「特別史跡特別名勝慈照寺庭園」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 4) 註1と同じ
- 5) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年





# 版 图



# 報告書抄録

ふりがな	しせき じしょうじ (ぎんかくじ) きゅうけいだい							
書名	史跡 慈照寺 (銀閣寺) 旧境内							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2008-11							
編著者名	高橋 潔							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2009年1月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせき じしょうじ 史跡 慈照寺 (ぎんかくじ) きゅうけいだい (銀閣寺) 旧境内	きょうとしさきょうく 京都市左京区 ぎんかくじちょう 銀閣寺町	26100		35度 01分 45秒	135度 47分 52秒	2008年11月 28日～2008 年12月26日	28m <sup>2</sup>	研修道場 新築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
史跡 慈照寺 (銀閣寺) 旧境内	別業 寺院	室町時代	石積遺構、堤状遺 構、溝状遺構		土師器、須恵器、緑釉 陶器、瓦器、焼締陶器、 陶磁器、瓦		東山殿・慈照寺に 関連する遺構と考 える。	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-11  
史跡 慈照寺（銀閣寺）旧境内

発行日 2009年1月30日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
発行  
住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1  
〒 602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地  
〒 604-0093 TEL 075-256-0961